
衝動

阿波野治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

衝動

【Nコード】

N5812J

【作者名】

阿波野治

【あらすじ】

作家志望の大学生である「俺」が、嫌悪していた市橋という同期生と膝を交えた時、彼を襲った衝動とは？

小説家らしくと言うより、専門家らしく客観的に分析しながら、彼が真相を独白する

俺が通っている大学の文芸学部同期に、市橋という作家志望の男がいて、そいつは、「萌え」とか「ツンデレ」とかの痛い単語を平気の平左で地の文に出す上に、合理的な根拠もないのに異様に異性に好かれる凡庸な青年が、複数のアクの強い性格の女性キャラに振り回されるという、所謂ドタバタ劇を繰り広げるだけの、ワンパターン極まりない、出来損ないのラノベみたいな三流小説しか書けないくせして、どこそこの賞に応募した自作の小説が一次選考に残ったのだとかいうことを、賞自体を取ったこともなくせに鬼の首を取ったように自慢するものだから、個人的には快く思っていない、と言うより大嫌いなヤツなのだけれども、その市橋が、某ライトノベルの賞の銀賞を受賞したとかいうことを、講義が始まる前の教室で、いつものごとくやたらと大きな声で、自慢気に触れ回っていたものだから、市橋によくない感情を持っている俺は、どうせ大したレベルの賞じゃないんだとか、単なるまぐれ当たりだらななどと、冷ややかな心境であいつの自慢話を聞いていたんだけど、やっぱりちよつと気になって、家に帰ってから、市橋が応募したという賞のサイトをネットで調べてみると、確かに受賞者の欄に市橋の名前があつて、作品に対する審査員からのコメントなども載っていたのだけれど、流石に銀賞を受賞しただけあつて、全体的に肯定的な評価がなされていて、あんな作風の小説が評価されるなんて世も末だな、などと面白くない気持ちになったのだけど、冷静になって考えてみれば、やはり、キャラが個性的という点は、作品における強みの一つであることには違いないのだし、あいつの小説は現に高く評価されているわけだから、あいつの作風は、文学ならばともかくとして、ライトノベルという舞台ならば充分に活きるのだ、自分は、今までにいくつかの賞に作品を応募したけれど一次選考に残ったこととすらない人間だから、受賞経験のある市橋を嫉視するがあまり、

あいつの作風を主観的に否定し、あいつの作品を過小評価していたに過ぎなかったのだ、という結論に至り、あいつのことを、同じ作家を志す者として少しばかり見直したと言うか、小説を書くことに關して言えば声高に偉ぶるだけの實力を持った人間なのだと認めると同時に、結果も出していない身分のクセに、偉そうに他者を、と言うより市橋のことを、頭ごなしに批判してきた自分を恥じたりもしたのだけれど、あいつを一物書きとして一定の評価を下したことで、これは自分が小説で結果を残せていないからだと思うのだけれど、あいつを上手く利用して、あいつが持っている小説作法に関する技術を盗んでやろうという、我ながら狡賢くも浅ましい目論見を抱いて、翌日に早速、大学構内の廊下で、次の講義に備えて教室を移動していた、自分からはまず話しかけることのなかった市橋の肩を叩いて、わざとらしくはにcanでみたりしながら、某賞の銀賞を受賞したんだってね、おめでとう、俺も賞にいくつか自分の作品を出したことがあるけど、賞を取ったことはおるか一次選考にすら残ったことがないから羨ましいよ、などと心情的には嘘八百の口上を並べ立てた上で、もしよかったら上手な小説の書き方を教えてくれないか、と申し出ると、見栄っ張りな性格だけあって頼られることに悪い気はしないのか、別に構わないよと、呆れるくらいにあつさりど約束が交わされて、ちょっと拍子抜けの感がなくもなかったのだけれど、とにもかくにも、その日の放課後、俺たちは近くのファミレスに立ち寄り、ひとまず、自分が好きな小説の話などをしていただけけれど、やっぱり小説家になることを夢見ている者同士だけあって、殆ど会話をしたことがなかった割に会話は弾んでいたのだけれど、話の流れをぶった切って市橋が突然、賞を取りたいんだったら、俺がお前の書いた小説を添削してやるよ、などと偉そうに言い出したものだから、単純に当惑した俺は、ここでは無理だよ、家まで帰らないと、と取り繕うように言くと、じゃあ今からお前の家に行こうぜ、と事も無げに答えるものだから、図々しいヤツだ、と失望したと言うか、呆れた反面、小説に關しては純粹に熱意のある

ヤツなんだなあ、と感心もしたし、何より教えを請うた立場の手前、ここまで来て「やっぱりいいです」とは言えないから、ご要望の通り市橋をアパートの自室まで案内して、世間話も程々に、早速、パソコンに打ち込んであった、後々大幅な推敲を施した上でどこかの賞に応募しようと思っていた、自信作の短編小説を見せると、あいつは読み終えた途端に笑い出して、まず一言目に、あからさまな嘲りの口調で、こりゃあダメだ、と吐き捨てたことまでは覚えていたのだけれど、それ以降のヤツの発言を全く記憶していないのは、その一言に思わずカツとなつて、市橋の顔面をブン殴ってしまったかなのだが、なぜ今まで嫌悪感を抱きはしても暴力など振るつたこととかなかった相手を殴ったかと言うと、今まで市橋は、自分の功績を大げさに自慢することは多々あつても、他人のことを貶めるような言動を取るようなヤツではなかったので、その点での戸惑いと怒りがあつたのと、自分の自慢の作品を否定されて、正しく「カツ」になつてしまったからなのだが、その殴られた市橋は、殴られる直前までは俺と相対する形で卓袱台に向かつていたのだけれど、殴られた拍子に、後方にあつた机の脚にしたたか頭をぶつけて、フローリングに仰向けに倒れて、打った箇所である後頭部を両手で押さえ、痛みに顔を思い切りしかめて、しかし力無く呻き声を洩らしている、というような状態だったのだけれど、そんな潰された虫のようにもがく市橋の有り様を見ると、何故だか分からないけど、丹精を込めて執筆した作品がごとく落選していった苦く悔しい思い出や、市橋が己の実績を自慢している姿をただ黙って聞いているだけの惨めな自分の姿、市橋が賞を取ったと聞いて、怒濤のような悔しさと脱力感が同時に襲ってきた時の形容しがたい屈辱感、といったものが甦ってきて、身体中が激烈極まる憤怒に満たされたことから、俺はその激情に身を任せて、猛然と市橋の髪の毛を鷲掴みにすると、そのままヤツの後頭部を、ヤツがぶつけたのと同じ机の脚に、一々計測などしていないので正確には分からないが恐らくは三十回ほど、力任せに打ち付けて、それからヤツの躰に馬乗りになつ

て、たまたま側にあつた置き時計を手に取り、それで顔面をメチャクチャに殴打したのだが、恐らくは血のせいで手を滑らせて時計を床に落として、派手な落下音が響いて、その拍子に俺は我に返ったのだけれど、そうすると眼下には、原型を留めていない時計と、両目が痛々しく潰れ、後頭部と口と鼻から目眩がするほど真つ赤な血を流し、ピクリとも動かなくなった市橋が居るものだから、俺は恐る恐るヤツの手を取って脈拍を計ったのだけれど、案の定血流の脈動は感じ取れなくて、見る見る顔色から血の気が失せていくものだから、市橋は死んだんだ、俺が殺したのだと理解するに至ったのだけれど、人を殺したと自覚した割には冷静で、狼狽が頭を駆け回るということもなく、ひとまずパソコンの電源を然るべき手順で切ったあと、卓袱台の上に腰を下ろして、時計のガラスで切ったらしい右手の傷、シャツに付着した返り血、動かない市橋などを順繰りに眺めながら、これからどうしよう、などと考えてみたのだけれど、何だか頭がぼんやりとしていて思考は全く前に進まなくて、そうこうしている内に、外から人の声や足音なんかが聞こえてきたものだから、先程のこの部屋での尋常ではない物音を不審がった隣人が警察に通報し、警官が自分の部屋まで駆けつけたのだ、と悟った俺は、たつた今、ブタ箱に行くのはやっぱり嫌だなあ、などと率直に思いながら、自分がしたことを、小説家らしくと言うより、評論家のようになるだけ客観的に顧みていた最中なのだけれども、やっぱり、世間的に見れば俺は、自分よりも才能のある同期生を嫉妬のあまり殺害した、同情の余地もない、それでいて嘲笑すべき、ちつぽけな殺人者の一人に過ぎないわけけれども、しかしながら、よくよく考えてみれば、別に俺は非行歴や前科があるわけでもなく、計画的に殺しをやったわけでもない、至って平々凡々な十九歳の少年でもあるのだから、一応死刑が適用される年齢ではあるのだけれども、それらの情状面が正当に考慮されるのであれば、過去の判例から見てもまず死刑はないと思うし、それに何より俺は、硬い物体に生きた人間の頭部を一切の加減なく打ちつけた時の手応えや、脈がなくなっ

た手首の感触、それに顔から見る見る血の気が引いて青白く変わる一部始終といった、要するに人殺しという、常人では容易に経験できない出来事を体験したわけだから、何年ブタ箱にぶち込まれるかは、何分これから決定される未来のことなので分からないのだけれど、出所した暁には、その掛け替えのない体験を基に小説を執筆して発表すれば、夢である小説家デビューが叶うかな、というビジョンが、まだ臆気ではあるけれど確かに見えてきたから、市橋ごときのために貴重な一生の内の何十年間を無駄にしなければならぬという事実は癪ではあるんだけど、咄嗟の衝動、瞬間的に沸騰した激情に任せて人を殺したことについては、俺は微塵も後悔していない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5812j/>

衝動

2010年10月8日15時24分発行